アメリカ社会と知識人

本間長世

一　知識人の課題

知識人（インテレクチュアル）とは何かという問いは、アメリカにおいてもくり返して立てられてきているが、知識人論が知識人間の問題であるにとどまらず、「知識人対多数派」という対立の図式という形で、アグニュー副大統領からマイケル・ノヴァクのようなカトリック知識人に至る人びとによって論じられ、第二次大戦後から冷戦時代を通じて知識人の主流となってきたリベラルたちの間に分裂が見られることが、今日のアメリカにおける知識人論の必要性を切実なものとしているように思われる。

一九三〇年代以来のニューヨーク知識人の機関誌的役割を果たしてきた雑誌『パーティザン・リヴュー』が、一九七二年夏季号において、今日のアメリカの文化的・政治的状況をどう見るかについての意見を求める特集を行なったことは、アメリカ知識人論という観点からみて興味深い。(1)

『パーティザン・リヴュー』の編集者たちは、今日のアメリカの美術や思想を論ずる風潮が保守的になり、一九六〇年代の諸傾向に対して批判的態度を取る調子が強まってきていることを指摘して、政治的立場における右寄りの傾向と文化的な右傾化との間には何らかの対応関係があると考え、そのような見方に対する意見を求めている。回答を寄せている人びとは、メリー・マッカーシー、ハロルド・ローゼンバーグ、クレメント・グリーンバーグのように、かつて『パーティザン・リヴュー』の主要寄稿者だった人びとから、リチャード・ポイリアのように今日の『パーティザン・リヴュー』の編集者たちの中心人物である人に及び、述べている意見も大きく分かれていて、一九六〇年代をどのように意味づけるかについてリベラルな知識人の間で論争が進行中であることがよく分かるのである。

リチャード・ホフスタッターが「がらくたの時代」と呼んだ一九六〇年代が、アメリカの知識人たちにどのような選択を迫ったかを跡づけるためにも、二〇世紀におけるアメリカ知識人の登場の意義をふり返ってみることが必要であろう。

ジョン・ルカッチによれば、一世紀前には「インテレクチュアル（intellectual）」という名詞は存在しなかった。一九世紀末以来、知識階級は前衛美術家たちを吸収し、二〇世紀に入ってからは、学者の世界にも知識階級が入り込んで、〝プロ〟の知識人と〝アマ〟の知識人の区別は消滅し始めたという。(2)

ルカッチは主としてヨーロッパの知識人を念頭に置きながら議論を進めているのであるが、アメリカにおいて「インテレクチュアル」という名詞が用いられた初期の例として挙げられるのは、哲学者ウィリアム・ジェームズが一九〇七年に行なった「大学教育を受けた者の社会的価値」と題する講演である。

この講演の冒頭において、ジェームズはまず「大学教育は何の役に立つか？」という問いを立て、それは立派な人物に会った時それと識別できる助けとなることであると答え、実際的な専門技術を教える学校（スクール）と、「リベラル・カルチュア」を教える大学（カレッジ）とを区別し、技術者が地下鉄を堀り、医者が盲腸を切るように、「リベラル・カルチュア」の教育を受けた者は優れた人物を見分ける批判的感覚ないし智恵を身につけるべきであると論じた。民主主義は優れた指導者を必要とするという前提に立って、ジェームズは、大学教育を受けた者は指導者意識を持つべきであり、指導者集団としての階級意識を持つべきだと主張して、フランスのドレフュス事件をめぐる論争で用いられた *"Les intellectuels"* がジェームズのいう知的指導者集団を指す語として最も良いと語ったのである。

この講演の結びで、ジェームズは、大学がその使命を果たさなければ国民は雑誌に導きを求めるようになるだろうと述べ、大学が世論に対する影響力を失って「一〇セント雑誌」が市民のための大学となるようであってはあわれだと述べたが、ラドクリフ・カレッジで行なわれたこの講演は皮肉にも「一〇セント雑誌」のひとつである『マクルアズ』に掲載された。(3)

実際には、ジェームズは、フランス語の "Les intellectuels" を引用しただけで、その他の場合はもっぱら「大学教育を受けた者（college-bred）」という語を使っており、「インテレクチュアル」という語は用いていない。すなわち、「インテレクチュアル」という語は、二〇世紀初頭のアメリカではまだ十分に熟した語ではなかったのであ

る。しかも、「大学教育を受けた者」という語で知識人を意味するように述べたことは、知識人論に混乱をひき起こすことにもなったのである。今日のアメリカにおいては、大学教育を受けた者がただちに知識人とはいえないであろうが、二〇世紀初頭においても、一方において大学の教授を知識人の仲間に加える傾向が強まると同時に、他方においては大学教授とは異なる存在としての知識人のあり方を求める動きも見られたのだった。

ポール・バークは、二〇世紀初頭の革新主義時代の知的指導者として、哲学者のジョン・デューイおよびウイリアム・ジェームズ、経済学者のソースタイン・ヴェブレン、歴史学者のチャールズ・ビアード、社会学者のE・A・ロスおよびレスター・ウォードを挙げ、これらの人びとに共通することは、彼等がすべて「アカデミック・メン（academic men）」であって、学者としてそれぞれの専門分野の中で社会を論じたことにあると説いている。そしてバークは、一九一〇年ごろから後のアメリカにおいて新しく社会革新の議論を展開した人びとは、ウォルター・リップマンを初めとして、学問の成果を直接社会に役立てようという関心が強く、みずからも大学教授とならずに、ジャーナリストないし社会評論家という形で、特定の専門分野にとらわれずに広く問題を論ずる態度を取ったところに、前の世代の学者たちとの相違が見られることを指摘している。

バークが引用しているところによれば、ハロルド・スターンズは一九二一年に「インテレクチュアル」を定義して、雑誌の編集者や社会の一般的問題を論ずる人びとをその中に含め、大学教授を原則として除外し、フランスのアンリ・バルビュス、アナトール、フランス、ロマン・ローラン、イギリスのショー、ウェルズ、チェスタートンなどを代表的知識人として挙げ、ウィリアム・ジェームズの定義とはかなりへだたった知識人像を提示した。

大学と知識人との関係は、アメリカの場合も決してきっぱりとしたものではなく、ヴェブレンやウォードが「アカデミック・メン」の典型であったとは言い難い反面、一九二〇年代以後においても、大学教授であってしかも知識人として行動する者が現われることは確かであるが、大学の外にいる評論家としての知識人の存在が目立ってきたのが一九一〇年代だったというバークの説は、受け入れてよいように思われる。[4]

ハロルド・スターンズが編集した『合衆国における文明』（一九二二）は、たびたび引き合いに出される書物ではあるが、やはり現代アメリカにおける知識人の出現を示す画期的な著作である。スターンズの序文によれば、三〇

名を越すこの書物の執筆者たちは、現代アメリカ文明を全体として見るという問題意識を持つという点で志を同じくする人びとであり、中心になったグループは定期的にスターンズの家に集まって意見を交わし合い、やがてアメリカ文明を真の文明として可能ならしめるために厳しい批判を行なうことに意見が一致したという。巻末の執筆者紹介による限り、大学教授は少数であり、大部分は雑誌ないし新聞の編集者および批評家である。すなわち、アメリカ文明そのものを理論的考察の対象にした点、大学の研究室とは無縁な場所で議論が深められていった点、スターンズが定義した意味での知識人が執筆者の中心となった点で、この書は社会評論の新しい型を示したのであった。

スターンズは、この書の各エッセイに一貫して流れる主題として、アメリカ人の偽善、アメリカ文明はアングロ＝サクソン文明ではなくさまざまな人種の文化の集まったものであること、アメリカ社会における精神的貧困の三つを指摘し、美に飢えている状態を痛ましいものと論じている。彼自身が担当している〝知的生活〟の項目の中で、スターンズは開拓者の生活が文化的にいかに不毛であったかを説いているが、アメリカの民主主義の伝統そのものの文化的低さをはげしく非難しているのは、ヘンリー・メンケンの〝政治〟の項目に関する文章である。

メンケンは、終始一貫連邦議会の議員たちの質の低さを攻撃し、彼等が文学について知っていることは、初等学校の教科書から得たもの程度であり、政治学についてもショトーカ成人教育や選挙演説などで説かれる無意味なことに過ぎず、歴史の知識も初等学校どまりで、美術や科学に関しては完全に無知であると述べている。[5] 一九二〇年代を通じてメンケンはアメリカの社会と文化を罵倒し続けたのであるが、〝政治〟と題するこのエッセイに見られる民主政治への不信と政治家に対する軽蔑の態度は、単にメンケン一流の偶像破壊の表われであるばかりでなく、知識人の多くに共通する文化的エリート主義と反政治的姿勢とを反映したものとみるべきであろう。進歩的で教養のある知識人と保守的で俗物的な国民の大多数という対立図式で、アメリカの社会と文化の問題をとらえようとする仕方は、ニクソン政権発足後に作られたものではなく、ジョゼフ・マッカーシーの赤狩り旋風に触発された一九五〇年代の知識人の洞察であるにとどまるものでもなく、現代アメリカの知識人が最初から設定した課題だったのである。

二　ドワイト・マクドナルドと雑誌

『ポリティクス』

現代アメリカ知識人の典型的存在として誰を挙げるかは、簡単には答えられぬ問題である。リップマンを代表的知識人とみなして、二〇世紀のアメリカの社会思想史を書くことは、恐らく十分に可能なことであろう。あるいは複数の類型を選び出して、比較対照しながらアメリカ知識人の多様性を描き出す方が、より正確かもしれない。しかしここでは、いくつかの点で知識人という名前に最もぴったりとしていると思われるドワイト・マクドナルドを例にとって、知識人がアメリカ社会にどう対応し、いかなる関心を深めていったかを見てみたい。

一九五七年に発表された自伝的文章「ポリティクス・パースト（Politics Past）」の中で、マクドナルドは、フィリップス・エクセター・アカデミーの学生だった時に友達二人と「快楽主義者」というクラブを作り、〝ブルジョワ打倒〟をモットーとし、オスカー・ワイルドとメンケンとを崇拝したことや、イェール大学の学生時代にリベラル・クラブのメンバーを見下し、学則について学校当局と争ったことを最初に述べている。その後マクドナルドは、ヘンリー・ルースの下で雑誌『フォーチュン』の編集にたずさわったのち、独立の評論家となるが、そのころ（一九三六年ごろ）からアメリカの政治に強い関心を抱くようになり、マルクス、レーニン、トロツキーの著作を読み出すようになる。すなわちマクドナルドは、高踏的な文学青年として出発し、転じて現実政治を動かすことに心を砕くのであるが、一九四四年から一九四九年まで独力で編集し発行した小雑誌『ポリティクス』が財政的に立ちゆかなくなって廃刊になったのちは、政治評論に興味を失って社会および文化を論ずる批評家となるのである。[6]

文化評論家としてのマクドナルドは、独特の大衆文化論を展開して大衆文化が高級文化を破壊する危険を説き、ロバート・ハチンスとモーティマー・アドラーの企画になる世界大思想全集『ザ・グレイト・ブックス』の編集方針と、この全集に附せられた思想索引『シントピコン』を痛烈に批判し、聖書の現代訳が英語の格調を下げたことを非難し、『ウェブスター大辞典』の第三版が、新しい言語観に立脚して言語の規範を示すという辞書の機能を放棄したことを責めるエッセイなどを書いた。これらは *Against the American Grain*（一九六二）と題する一書におさめられたが、マクドナルドは、自分はまとまった本を書くことができず、書物として出版されたものも、元来は雑誌に連載した文章であると〝ポリティクス・パースト〟の中で告白している。

一九六〇年代の半ば以後ヴェトナム戦争が深刻化すると、マクドナルドは再び政治に対する関心を示し、反戦知識人として行動するようになり、大学紛争においても、コロンビア大学の反逆した学生たちを擁護する発言をして、反逆学生に批判的なコロンビア大学教授を憤慨させた。

このようにマクドナルドは、文化と政治との両面にわたって興味を示し続け、ラディカリズムの立場に立ってブルジョワの政治とブルジョワの文化に対する批判を浴びせ続けてきたわけであるが、雑誌『ポリティクス』の編集方針は、スターリン下のソ連に対する強い反撥、全体主義的傾向に対する警戒、ヘンリー・ウォレス流のリベラリズムに対する反対、大衆文化が高級文化を害する危険に対する警鐘、ヨーロッパ知識人に対する連帯感などを基調にしていた。マクドナルドは、ユダヤ人の家に生まれてニューヨーク市立大学ないしコロンビア大学に学んだ典型的ニューヨーク知識人ではなかったし、進歩的知識人の機関誌ともいうべき『ニュー・リパブリック』や『ネーション』の立場に対しても批判を加えたのであるが、『ポリティクス』の編集方針は一九五〇年代のリベラルな知識人の立場と大幅に重なり合う結果を示したのである。

しかし、マクドナルドは本質的にアナーキストであり、また平和主義者であった。『ポリティクス』の発刊の辞において、彼はドイツとソ連とを共に全体主義国と呼び、社会主義の将来にとって最も危険な敵は資本主義ではなく官僚制的集合主義であると述べ、他方では、第二次大戦は民主主義と全体主義との争いではなく、相争う帝国主義国の衝突であるという見方を取った。[7] マクドナルドによれば、ナチズムが勝つという危険をおかすことになっても、社会主義者は戦争を支持するべきではなく、他の手段にうったえるよう呼びかけるべきだったというのであるが、このような彼のアナーキズムと平和主義のゆえに、彼はのちに一九六〇年代に入ってからニュー・レフトに親近性を見出すようになるのである。

『ポリティクス』の第一号において、マクドナルドは「大衆文化」というコラムを常設してこれまで無視されてきた分野に注意を払うことを宣言し、その最初として彼の名を高からしめた「大衆文化論」を掲載した。

マクドナルドの大衆文化論は、過去一世紀の西欧文化を〝高級文化（High Culture）〟と〝大衆文化（Popular Culture）〟とに分け、かつての貴族制社会においては高級文化と〝民衆芸術（Folk Art）〟との区別がはっきりしていたため、高級文化はすぐれた芸術を生み出し得たが、現代の大衆文化は高級文化の俗化を目指すものであり、そ

のために高級文化は大衆文化と競争せねばならなくなって堕落するというのである。しかし、マクドナルドは、「エリートのための大衆文化」とも呼ぶべきものとしての〝アカデミシズム（Academicism）〟や、アカデミシズムをしりぞけ、従って間接的に大衆文化をもしりぞけた〝前衛主義（Avantgardism）〟という概念も用いているし、映画は大衆文化であるが、グリフィスやシュトロハイムやチャプリンの作品は前衛主義の萌芽を蔵していたと評価しているのであり、さらにアーチボールド・マクリーシュの詩は〝にせの前衛主義〟というべきだとも論じているので、彼の議論は一読した時に与えられる印象ほどには明快ではない。

のちになってマクドナルドは、大衆文化を〝マスカルト（Masscult）〟と〝ミドカルト（Midcult）〟とに分け、一見高級文化を尊重するかに見えるミドカルトが高級文化の真の敵であるという説を展開するが、[8] この場合にも彼は特定の作品――たとえばソーントン・ワイルダーの「わが町」など――が彼の基準に照らして高級文化に属するかミドカルトに属するかという分類学を説くことに力を入れ、作品や作家の独断的な品定めが次々に行われるので、痛快な評論とはなっているが、分類の基準の妥当性を検討し出すと議論は必ずしも明快ではなくなってくるのである。

はっきりしていることは、マクドナルドが文化的エリート主義者であることである。彼の議論によれば、高級文化の活力を回復させるためには、大衆文化を通じて民衆を搾取することをやめるか、民主主義そのものを廃止するほかはない。政治的ラディカルとして民主主義を奉ずるマクドナルドは、階級文化をのり越えた真の「人間的文化」の到来を待望するのであるが、その主張は具体性を欠いている。

『ポリティクス』の中の政治論は、文化論よりもはるかに明快にスターリン主義反対であった。一九四八年春季号に発表された「合衆国対ソ連」と題する文章で、マクドナルドは、今日のソ連は十年前のドイツと同じく社会主義およびリベラリズムに対する脅威であり、世界中で最も軍国主義的で、帝国主義的で、反民主主義的で、反動的な国がソ連であると述べ、一九三〇年代を知らない新しい世代のために、ソ連の真実を語ってソ連に関する幻想を吹き払うべきだと主張した。[9]

一九四八年の大統領選挙における進歩党の大統領候補ヘンリー・ウォレスに対して、マクドナルドが『ポリティクス』誌上で執拗な批判攻撃を行なったのも、進歩党の運動がスターリン主義者たちによって引き廻されていると判断したからにほかならない。

マクドナルドによれば、進歩党という第三党運動を推進したのは、マーシャル・プランに反対してソ連の国益に奉仕しようとしたアメリカ共産党であって、進歩党の運動は草の根から起こった庶民の運動ではなかった。党の結成大会には広告業の技術が活用され、代議員の六割は四〇歳以下の若い世代の人びとが選び出され、ユダヤ系、黒人、メキシコ系の代議員たちが、抑圧されている者の象徴として強調されたのであり、七万人の共産党員しかいないアメリカで、百万票がウォレスに投ぜられたのであるから、〝左翼の全体主義〟の影響力は恐るべきものであるというのが、マクドナルドの主張であった。[10]

一九四九年三月二六日および二七日に、ニューヨークのウォルドーフ＝アストリア・ホテルで「世界平和のための文化科学会議」が開かれた時、マクドナルドはこの会議に参加して報告記事を『ポリティクス』に書き、この会議がコミュニストの路線に忠実な会議であって、マクドナルド自身やメリー・マッカーシーなどのトロツキストたちが、ソ連における美術家の状況についてソ連代表団に問いただしても、満足な答えが得られなかったことを述べた。詩人のロバート・ローウェルや、作家のノーマン・メイラーも、会議を支配した親ソ的空気に反する質問ないし発言を行なったが、後年メイラー、ローウェル、マクドナルドの三人は、ヴェトナム戦争に反対して行なったペンタゴンへのデモ行進の同志となったのである。

マクドナルドは、アメリカ国務省がともかくもソ連代表団の入国を許可し、この親ソ的な会議がニューヨークで開かれることを許したのに対し、モスクワで親米的な会議が開かれてアメリカ代表団が参加を認められることは難しいだろうと皮肉を述べて、ソ連の全体主義の方がアメリカ以上に文化活動にとって危険であることを論じているが、報告記事の中で興味があるのは、外国代表団の歓迎パーティに出席を許されて、彼と立場を異にするスターリン主義知識人たちと語り合った印象を述べている部分である。マクドナルドがそこで見出したことは、彼等も彼と同じ本を読み、同じ展覧会や外国映画を見、黒人やユダヤ人や貧困者などアメリカ社会で下積みになっている人びとの味方であるという信念を抱き、カトリック教会や国務省に反対であるという点で共通していることだった。それと対照的に、この会議に反対してホテルの周りにピケを張った人びとは、マクドナルドは共通点を見出し得なかったのである。[11]

一九三〇年代の左翼知識人の一人だったマクドナルドは、一九四〇年代の後半には、マルクス主義も、ジョン・デューイによって代表されるアメリカの進歩主義も、現代社会の改革のためには有効な手段を提供し得ないという考

えに到達した。デューイと、デューイの教えを奉じのちにデューイを批判したランドルフ・ボーンとを対置させながら、マクドナルドは現代におけるラディカルのあり方を問い直したが、彼の出した答えは、当時のアメリカにおける思想的混迷を彼一流の仕方で解決しようとした試みであった。すなわちマクドナルドは、人間は有限な不完全な存在であるから、全面的な完全な解決を求めるべきではないと主張し、また芸術や文学の場合と同じように、政治においても多くの人にうったえるようなやり方は質の劣ったものであって、より小さい問題についてより少数の人に語りかける方が有効であると述べたのである。さらに彼は、敵に対する最も効果的な集団行動は、組織が自発的で極めてゆるやかな場合に可能であるとして、必要なことは、国家および一切の権威に対して軽蔑的、懐疑的、嘲笑的な態度を取るよう促すことであろうと論じた。[12]

一切の権威に対して嘲笑的態度を取る青年たちが一九六〇年代に現われた時、マクドナルドが彼等を擁護する立場に立ったのは、彼自身にとっては、一貫性のある行動だった。

三　知識人と社会

一九五〇年代を通じて、アメリカのリベラルな知識人の主流は、共産主義を民主主義に対する脅威であると見なすことと、民主主義社会においてすぐれた文化的伝統を維持し、新しい文化を創造してゆくために、大衆文化の挑戦を深刻に受けとめねばならないと考えることにおいて、ほぼ意見が一致していたといってよいであろう。一九三〇年代をくぐり抜けた神学者のラインホルド・ニーバーや、文学者のライオネル・トリリングのような人びとは、知識人の間で深く尊敬されたのであり、一九三〇年代に共産党の機関誌として出発した『パーティザン・リヴュー』や、反共リベラリズムの雑誌『コメンタリー』や、古くからのリベラリズムの雑誌『ニュー・リパブリック』ならびに『ネーション』や、イタリアから渡ってきたマックス・アスコリによって創刊された『リポーター』などの何れにも寄稿する人びとが存在し得たような空気が、一九五〇年代にはただよっていたのである。マッカーシーズムは、確かに知識人に衝撃を与え、〝反共主義者〟、〝反・反共主義者〟、反・反・反共主義者〟などのレッテルがもてあそばれたこともあったろうが、一九五〇年代のアメリカ社会を包んだ一種の生ぬるい風潮が知識人社会にも及んだことは、恐らく否定できない。

しかし、一九六〇年代に入ってから、知識人と社会との関係を根本から考え直すことを迫る変化が次々に起こった。第一に、ケネディ大統領が学者・知識人を登用したことによって、知識人と権力との関係が問題となり、アルフレッド・ケイジンのように「ケネディと他の知識人たち」を論ずる文章を書く者と、アーサー・シュレージンガー・ジュニアのようにホワイトハウスから見たアメリカ現代史を書く者との視点の相違がはっきりした。第二に、ヴェトナム戦争、ニュー・レフトの台頭、〝反文化〟の出現によって、戦後リベラリズムの政治的・文化的立場が混乱した。アメリカ政府のヴェトナム政策に対する批判は、冷戦の起源についての再解釈と結びつき、アメリカの歴史的伝統を極めて否定的に評価する傾向や、いわゆる「コンセンサス・スクール」への非難を生んだが、それらを含めて、一九六〇年代の新しい知的状況は、社会学者のロバート・ニスベットのいう〝権威への反逆〟[13]という句で要約することができよう。

既成の権威に対して反逆することは、西欧知識人の伝統であったし、既成の価値に挑戦して新しい美を創造することは芸術家の課題であった。しかし、権威そのものを否定し、個人の創造性ないし個人性を崇拝して新しい権威や新しい基準を確立することを拒否することが、一九六〇年代末のアメリカにおけるほど強く主張されたのは、すくなくともアメリカの歴史においては例を見ないことだといえよう。

権威の破壊とそれによって生ずる混乱ないし無秩序を、新しい文化を生み出す豊かな土壌とみるか、それとも野蛮の到来とみるかで今日のアメリカの知識人の陣営は分裂している。

冒頭に触れた『パーティザン・リヴュー』のシンポジウムの中で、ロバート・ブルスタインが述べているように、今日のアメリカにおける知的雑誌は、反文化とニュー・レフトの主張に同情的であるか反対であるかによって立場がはっきりと分かれ、「青年の運動、歴史の再解釈、アンジェラ・デーヴィスの著書、ポルノグラフィーと検閲の問題・・・などについて、『ニューヨーク・リヴュー』および『パーティザン・リヴュー』の側と、『コメンタリー』および『パブリック・インテレスト』の側とが、それぞれどんな立場を取るかは、疑う余地がないではないか」[14]ということになってしまっているのである。

ブルスタインは、このような状況は文化の不毛を招くと論じ、イデオロギー的争いを避けて文化的多様性を促進するためにも、文化の高い基準を確認することが必要だと説いている。これに対して、『コメンタリー』の編集長であるノーマン・ポドレッツは、政治的ラディカルであってしかも反文化に対して批判的な知識人が存在することを認め

ながらも、反文化とは結局のところ文化に関わりのない政治的主張であって、ニュー・レフトと反文化とを合わせたひとつの「運動」が行なわれてきたのであると論じている。

政治を文化的現象としてとらえ、同時に文化を政治的現象としてとらえる傾向は、知識人につきものであるかもしれないが、文化としての反文化の可能性は、問題の書となったチャールズ・ライシの『緑色革命（*The Greening of America*）』の主張からみる限り、かなり乏しいように思われる。かつてコリン・ウィルソンの『アウトサイダー』を痛烈に批判したドワイト・マクドナルドが、ライシュの悪文に目をつぶって『緑色革命』を好意的に評価しているのは不思議なようであるが、マクドナルドはライシュの〝意識革命〟のアナーキズムに共鳴し、自動車の修理工が彼の機械についての無知を軽蔑する労働者であるよりは、長髪でひげを生やした〝意識Ⅲ〟に属する青年である方が親しみやすいことを告白している。[16]

権威に対する反逆は大学にも及んだことはいうまでもないが、皮肉なことに、大学を離れたところに活躍の場所を見出したはずの知識人の多くは、今日さまざまの資格で大学の中に入っているのである。マックス・ラーナー、ダニエル・ベル、アルフレッド・ケイジン、ソール・ベロー、ハロルド・ローゼンバーグ、アーヴィング・クリストルなどは、それぞれ大学教授となったし、マクドナルドもイェール大学やマサチューセッツ州立大学で講義をするに至っている。この場合には、知識人として名声を確立した者が大学に迎えられるわけであるが、この傾向が今後強まるとすれば、今日のアメリカ社会では大学の外に知的共同社会を見出すことが困難になってきていることが示されるといえるであろう。

知識人と社会との関係の再検討を迫る第三の変化として、白人少数人種集団（ホワイト・エスニックス）の自己主張が強まってきたことが挙げられる。スロヴァキア系カトリック教徒の哲学者マイケル・ノヴァクは、南および東ヨーロッパからの移民の子がアメリカ社会の中の自分の地位を見渡すと、北欧人優秀説という人種主義的偏見と、ニューイングランドのWASPの知識人およびユダヤ系知識人の教養主義的偏見が、自己に向けられているのを見出すと述べている。黒人やインディアンを軽蔑することをあえてしない知識人は、ホワイト・エスニックスの価値観を嘲笑してはばからないというのである。ノヴァクは、左翼の知識人はアメリカは病んでいるというが、それは知識人が病んでいることではないかと反撃し、知識人のアメリカ観は根本的にアングロ＝サクソン的で、人間を孤独で互いに切り離された存在としてとらえると論じ、平等主義を唱えて心情的にはエリート主義である知識人の矛盾を指摘している。[17]

アメリカの知識人は、これらの変化の中で、民主主義社会における知識人のあり方を新しく探ってゆかねばならないのである。

註（1）"On the New Cultural Conservatism," *Partisan Review*, vol. XXXIX (Summer,1972), pp. 397—453. この特集では、最初に編集者たちの状況評価と問題設定が述べられ、次に問い合わせを受けた19人の人びとが意見を述べている。

（2）Cf. John Lukacs, *The Passing of the Modern Age* (Harper Torchbooks edition; New York: Harper & Row, 1970), pp. 113—117.

（3）ジェームズの講演を簡単に読むためには、Robert A. Skothein and Michael McGiffert, eds., *American Social Thought* (Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company, 1972), vol. II, pp. 125—130を参照。

（4）Cf., Paul F. Bourke, "The Implications of the Progressive Movement," *ibid.*, pp. 204—214.

（5）Cf. H. L. Mencken, "Politics," Harold E. Stearns, ed., *Civilization in the United States* (London: Jonathan Cape, 1922), pp. 21—34.

（6）Cf. Dwight Macdonald, *Memoirs of a Revolutionist* (Meridian Books edition; New York: Meridian Books, 1958), pp. 3—31.

（7）Cf. Dwight Macdonald, "Why *Politics?*" *Politics*, vol. I (February, 1944) pp. 6—8.

（8）Cf. Dwight Macdonald, *Against the American Grain* (New York: RandomHouse, 1962), pp. 3—75.

（9）Cf. Dwight Macdonald, "USA vs. USSR," *Politics*, vol. V (Spring, 1948), pp. 75—77.

（10）Cf. Dwight Macdonald, "The Wallace Campaign: An Autopsy," *Politics*, vol. V (Summer, 1948), pp. 178—183.

（11）Cf. Dwight Macdonald, "The Waldorf Conference," *Politics*, vol. VI (Winter, 1949), pp. 31-A—32-D.

（12）Cf. Dwight Macdonald, "The Root Is Man (Part II)," *Politics*, vol. II (July, 1946), pp. 210—214.

（13）Cf. Robert Nisbet, "The Nemesis of Authority," *Encounter*, vol. XXXIX (August, 1972), pp. 11—21.

（14）"On the New Cultural Conservatism," *Partisan Review*, vol. XXXIV (Summer 1972), p. 414.

（15）Cf. Norman Podhoretz, "Intellectuals at War,"

Commentary, vol. LIV (October, 1972), pp. 4—8.

(16) Cf. Philip Nobile, "An Interview with Dwight Macdonald," Philip Nobile, ed., *The Con* Ⅲ *Controversy* (New York: Pocket Books, 1971), pp. 265—273.

(17) Cf. Michael Novak, *The Rise of the Unmeltable Ethnics* (New York: The Macmillan Co., 1972), pp. 135—152.